

整形外科医の職業被曝

整形外科領域では脊椎手術や神経ブロック、骨折や脱臼の整復操作や骨接合術などにおいてX線透視は不可欠なツールであり、大きな恩恵を受けていることは言うまでもない。一方で放射線を用いた医療には被曝を伴うことを忘れてはならない。医療分野での放射線被曝は患者側と医療従事者側の被曝に大別され、患者側の被曝ではCTによる医療被曝が多く、医療従事者側ではX線透視による職業被曝が主である。低侵襲治療の発展に伴い、医療者側の職業被曝の増加による発癌や早期白内障の報告が散見されるようになり、近年では労災事例も報告されている。それを受けて法改正がなされ、2021年4月から日本国内でも水晶体の被曝線量限度が大幅に引き下げとなった。

診断や治療手技については、学会レベルでも盛んに議論されますがますます発展してきているが、医療者側の安全面に関する卒後教育は不十分であり、自身の職業被曝に無頓着な医療者は少なくない。本分野でも学会レベルでの啓発、各医療機関での卒後教育が必要である。

本特集ではまず、職業被曝の基本知識と原理、そして身体影響について、各分野の最前線でスペシャリストとしてご活躍の二ツ矢先生、林先生、北川先生、鈴木先生にそれぞれわかりやすくご解説いただいた。続いて、整形外科領域では脊椎、外傷、手外科領域での職業被曝が多いため、各領域で職業被曝低減対策に造詣の深い山根先生、松井先生、本田先生、善家先生に、実臨床の場での具体的な低減対策について述べていただいた。さらに二階堂先生には、自身の経験談として職業被曝による皮膚障害の詳細な経過についてご解説いただいた。

職業被曝を減らすために最も有効な方法は、診療中の自らへの被曝量を意識することである。本特集をご一読いただければ、明日からの診療において自らの職業被曝についての意識が高まり、その結果、手指や手などへの被曝量が低減することを確信している。

整形外科医にとって不可欠な診断・治療ツールであるX線をむやみに恐れる必要はない。正しく恐れ、正しく評価し、正しく利用すればよいのである。本特集が、整形外科医を含むすべての放射線医療従事者にとって、日常診療を安全かつ健康に遂行する一助となれば、企画者としてこれに勝る喜びはない。

(山下一太)